

学習者に適した教育用例文コーパス SCoRE の 日本語対訳文に関する研究

若松弘子*, 中條清美**

A Study on Learner-Appropriate Japanese Translations for the Sentence Corpus of Remedial English (SCoRE)

Hiroko WAKAMATSU*, Kiyomi CHUJO**

Keywords: データ駆動型学習, 教育用コーパス, パラレルコーパス, 翻訳

1. はじめに

教育用例文コーパス SCoRE (<http://www.score-corpus.org/>) はデータ駆動型学習 (data-driven learning: DDL) を効果的に支援する強力なツールである。DDL とは、外国語学習法の一つであり、この学習法において、学習者は複数の言語使用例を注意深く観察し、語彙の意味や文法などを帰納的に探索する。つまり、創始者の Tim Johns が言及しているように、学習者自身が「言葉の探偵 (language detective)」となって、コーパスから「自力で様々な言語の傾向性や法則を発見していく」(Johns, 1997: 101)¹⁾ 学習法である。DDL によって高い学習効果が得られることはすでにいくつかの研究によって報告されている^{2), 3)}。授業での DDL 実践では、教師は事前に Johns が言うところの「発見」を導くことができるような問いかけを準備しておき、学習者はその問いかけに答えるために、自らパソコンを操作するか、あるいは、ハンドアウトを用いて、複数の英文を観察し、規則性を探る。過去を振り返ってみると、DDL の初期において、英語学習者に提示する英文の提供元となったのは British National Corpus (BNC) や Corpus of Contemporary American English (COCA) であった。しかし、これらのコーパスのレベルは日本人

学習者の多くには合致しないため、日本の英語教育の現場で DDL を導入するのは困難であった。そこで、日本人英語学習者のレベルに合わせ、基礎的で、簡易な英文を用いたコーパスの必要性から開発されたのが、SCoRE である⁴⁾。SCoRE は日本人英語学習者に対する DDL の実践を想定し、簡易な英文を集積したコーパスと操作しやすいインターフェースを併せ持つ。学習者の文法理解や定着を促す目的を持つ SCoRE は、コンコードンスラインを提示するだけでなく、文法項目ごとに、その当該文法項目が用いられている英文と対応する日本語訳を表示することもできる。この日本語対訳は、学習者の学習負荷や心理的負担を下げ、英文の構造や文法に注力させることを意図したものである。SCoRE を利用した DDL 実践の参加学習者は日本語対訳が付けられていることを好意的に評価していることが報告されている^{5), 6)}。また、SCoRE を用いた DDL 授業の実践は継続して重ねられており、学習効果が高いことや、学習者の満足度も高いことなどが、複数、報告されている^{7), 8)}。

SCoRE は、DDL の実践だけではなく、学習に適した英語例文のデータバンクとしても非常に有用である。その理由には、DDL 実践用として実用的であることと重複するが、特に、SCoRE を構成する英文が文長と米国の語彙習得学年の基準に基づいて、難易度別に初級、中級、上級に区分されていること、現在進行形、現在完了

*茨城大学非常勤講師

**日本大学生産工学部教養・基礎科学系教授

形、仮定法、関係詞などといった文法項目ごとに整理されていること、英文に対して日本語訳が付与されていること、が挙げられるであろう。また、非営利で使用するのであれば、無償でコピーやダウンロードが可能で、各自が目的に沿うように利用できることも特徴となっている。

本稿は、SCoRE の日本語対訳文に焦点をあて、特に、日本語母語話者が英語を学習するときに適すると思われる対訳について考察し、いわゆる「日本語らしい」日本語と英語学習に適すると思われる日本語が、どのような点で異なるのかについて述べる。筆者らは、過去に、SCoRE の日本語訳の作成方針やその事例について発表している^{9), 10)}。しかし、これらの論文発表以降、SCoRE に収録されている例文が格段に増えていること、また、SCoRE に新たな機能が追加され、学習者はオンラインで日本語訳付きの適語補充問題に取り組むことができるようになってきていることから、改めて、学習に適した訳の作成の方針を考察することは有意義であると考えた。また、学習用の日本語訳と英語例文の観察に基づいた日本語や英語の特徴についても示す。

以降では、まず、第2節で、対訳の基本方針を紹介する。この基本方針とは、対訳を付与する際の実務上の取り決めである。場合によっては、何らかの理由で、英語例文の訳について共通のルールが適用できる場合とできない場合があることも見ていく。第3節では、具体的にどのような訳が付与されているのかについて、見本となる例を見ていく。一方で、逐語的に訳すだけでは、一義的に取れなかったり、解釈が難しいような分かりにくい訳になってしまうような例なども紹介する。最後に第4節で、現時点における、英語学習に有用な日本語訳についての考察をまとめる。なお、SCoRE のインターフェースや具体的な使用方法については SCoRE のウェブページに掲載されている「ユーザガイド」や他文献⁹⁾に譲るため、本稿では扱わない。

2. SCoRE の日本語訳の基本方針

SCoRE の英語例文に対応する日本語の訳文作成にあたっては、学習者が目にする日本語は、なるべく統一的な文体であることが望ましい。また、一読して理解できる日本語であることも大事である。先述したように、SCoRE の機能の一つである、適語補充問題をウェブ上で実施するにあたり、日本語訳が表示される。そのため、可能なかぎりにおいて、日本語訳を見て、英語の単語が一義的に推測しやすいような訳となることも追求したい。本節では、このような観点に立ち、SCoRE の日本語訳の作成を進める過程を通して、徐々に確立していった、日本語対訳に際してのルールや方針について説明す

る。

2.1 日本語対訳の表記についての方針

日本語対訳を作成するにあたり、ひらがな、カタカナ、漢字などの文字種の扱いなどの表記についてのルールは次の通りである（中條他、2018 抜粋および一部改変）¹⁰⁾。これらは、英文の難易度のレベルを問わず、基本的には、すべての英文の日本語訳について共通のルールである。ただし、(3)と(5)については、以下で記すように、留意すべきことや、適用されない場合がある。

- (1) 句読点は全角のカンマ「,」と丸「。」を用いる。英語例文にカンマがあるときや、日本語訳にカンマがないと正しく意味が取れない時に限り、カンマを用いる。疑問文には半角の「?」を付ける。
- (2) 数字は基本的に半角で表示し、算用数字を用いる。「一人」、「一個」ではなく、「1人」、「1個」とする。
- (3) 「です、ます」調の敬体を用い、「だ、である」調の常体は使用しない。
- (4) 表示されている英語の語句を説明するために、カッコ「()」を付けた説明的な訳を加えない。
- (5) 読みやすい表記を目指すため、漢字とひらがなの両方の表記が一般的と思われる場合は、ひらがなの表記を採用する。難しい漢字は使用しない。

まず、(3)について留意しておくべきことは、間接話法が用いられている表現では、発言内容などを示す節では常体の使用が広く認められていることである。たとえば、「彼の成績があがることはなさそうだと思います」という複文の場合、従属節の文節末は「なさそうだ」という常体が用いられており、自然な表現となっている。もし、この常体を敬体に変えて、「彼の成績があがることはなさそうですと思います」のように言い換えた場合、個人差はあるが、一般に容認度が下がる。また、日本語では引用句に敬体が用いられとき、必ず引用を示す助詞の「と」が必要である（鎌田、2000）¹¹⁾。つまり、常体の場合、「と」があっても、なくても、容認される（「私は花子に明日も来るかと尋ねた」および「私は花子に明日も来るか尋ねた」）のに対し、敬体の場合、「と」が無い場合は、認可されない文になる（「私は花子に明日も来ますかと尋ねた」はよいが、「私は花子に明日も来ますか尋ねた」は非文。）日本語の引用についての詳細な議論は鎌田（2000）¹²⁾、日本語学習者の引用に関わる誤用の興味深い現象はデロワ中村・伊藤（2015）¹³⁾に譲るが、SCoRE の日本語対訳において、間接話法の英文については、引用を示す日本語助詞の「と」を訳出し、引用部分は常体を用いることとした。なお、直接話法の

場合は、「ボブは『専攻を変えるのは簡単です』と言いました。」のように発話内容を示す従属節末は敬体で表す。(2019年2月時点で、SCoREの日本語訳には、このようになっていないものが数例あるが、これらは今後の修正の対象としたい。)

(5)の文字表記の選択については、SCoREの難易度レベル別例文(初級, 中級, 上級)のうち, 上級者レベルの英語文に対応する日本語訳については, 読みやすさ等を考慮し, 初級や中級レベルほどには厳密に適用されていない。しかしながら, 頻出する語については, 統一を図っている。たとえば, 「誰」は「だれ」, 「時」は「とき」, 「煙草」は「たばこ」, 「頬」は「ほお」, 「下さい」は「ください」, 「美味しい」は「おいしい」, 「達」は「たち」, 「子供」は「子ども」などである。一方, 「what」に対応する訳は「なに」というひらがな表記ではなく, 「何」の漢字表記を用いている。また, 身近な動物や家畜の表記については「犬」, 「猫」, 「馬」, 「牛」など, 漢字表記で表示するが, 親しみが薄いと思われる動物については, 「ネズミ」, 「シチメンチョウ」などのように, カタカナで表記する。

2.2 日本語対訳の表記以外についての方針

上記で紹介したのは, 日本語対訳作成についての表記についての方針であったが, 他に, 対応する語彙の選択や英文の語を明示的に訳出するか否かについて, 英語学習目的の日本語訳を作成するという観点から, 訳出担当者間で基準となるような考え方を共有している。以下では, その考え方について説明する。

2.2.1 英語学習に利する日本語対訳作成と等価性

「訳すること」の理論的な中心概念は等価性(equivalence)である。原文となる起点テキスト(source text)と訳出される目標テキスト(target text)は, 現実世界の同じ事象を示し, 等価性はこの起点テキストと目標テキストとの間に実現するとされる。等価性は, さまざまなレベル, たとえば, 語レベルや語を越えたレベル, 文法的な形式レベル, 語用論的なレベル等々において, 異なる程度で, 実現し得る。そして, 実際の訳出においては, すべてのレベルで等価性を実現する必要はなく, どのレベルの等価性を優先するかは訳出者に委ねられている^{14), 15)}。

SCoREの英文に付与された日本語訳は学習を円滑にし, 特に文法学習に有用であることを意図している。そのため, 英文と日本語対訳の間での命題の等価性があることは必須であるが, 他に, 叙述文, 疑問文, 命令文などの文の種類としての等価性や, 主語や目的語といった文法関係の等価性, 文の構造の等価性などが重視される必要がある。つまり, テキストの伝達内容が一読で理解でき, かつ, 英文の構造や, 可能な範囲で品詞等も, 対

応する訳を目指すことを基本方針とする一方で, 通常の日本語母語話者が書いたり, 話したりするような, 流暢さや, 日本語らしさを損なう可能性をある程度許容している。そのため, 語用論的な等価性や, 想定される発話状況の等価性はどちらかという考慮の対象外にある。よって, たとえば, 日本語の女性や老人といった特定の役割を想起させるような「役割語」¹⁶⁾は, SCoREの対訳においては用いられない。

また, 文法に関連する等価性を優先することを余儀なくさせる背景の一つにSCoREの英文は1文ずつの構成であるということもある。1文であっても文脈を全く想定できない文というのは現実にはあり得ず, 英文に含まれる単語から, 文が用いられる状況をある程度限定することは可能ではあるが, その発話状況にふさわしい訳を考えるのではなく, 当該英文表現に含まれる文法項目や文の構造をできるだけ反映するような日本語訳が付けられている。

2.2.2 優先されない等価性の例

以上の方針に沿って作成された日本語訳がどのような特徴を持つかについて, SCoREの英文を訳出するときに優先順位が低い項目の等価性は日本語訳においてはどのように対処されているのかという観点から説明する。

(1) 人称代名詞の明示

日本語では人称代名詞を省略することが可能であり, 自然である場合も多い。また, 省略せずに明示する場合には, たとえば, 一人称単数の場合, 「俺」, 「あたし」, 「ぼく」, 「我」などのさまざまな表現があり, 話し手の社会的地位や状況, 聞き手との関係などの文脈を想起させる情報を持つことができる。対して, 英語の一人称単数は *I* であり, 原則, 表示する必要がある, 特別な場合をのぞいて, 文脈に応じて語彙が変化することはない。二人称や三人称やそれらの複数形についても同様である。そのため, SCoREの日本語対訳においては, *I* は「私」, *you* は「あなた」, *he* 「彼」, *she* 「彼女」に対応するものとし, 基本的には一律的に訳している。しかし, 当該の文から主格が自明であったり, 所有格の人称を明示するのがあまりに不自然であったりするときなどは, 人称を訳さないときもある。(特に, 上級学習者用の英語例文の日本語訳については明示しないことも多い。) SCoREの例文では, たとえば, *I wish I had more money.* という英語文では, *I* が二回使用されているが, 「私にもっとお金があればなあ。」と訳している。

(2) 終助詞に関わる制限

SCoREの日本語対訳では, 対人関係を明示するような終助詞の使用を避けている。日本語の文末表現は, 形式としては, 英語に直接の対応がないものである。日本語文の文末にある「寒いですね」の「ね」や「風邪ひくぞ」の「ぞ」は, 聞き手が存在することを想定して発話

されるときに出現し、相手の同意を求めたり、判断の念押しを表現したりするものであるが、英語にはそれらについて一義的に語彙として対応するものがない。文末の「のだ」のような話し手の認識を改めて表示するような終助詞も同様である。SCoREの日本語訳では、勧誘を表す「～しましょう」や疑問を表す「～か」のような文法的機能に主眼が置かれるような文末表現は訳出に用いているが、全体的には、それら以外の文末詞については使用を控えている。なお、終助詞「ね」については、*That's what it is, isn't it?*のように、付加疑問文として明示的に表現されている場合について、「～ですよ？」と「ね」を用いて訳出している。（訳出の当初から厳しくルールを定めていたわけではないため、「ね」をコンコーダンサーで検索すると、付加疑問文の付かない平叙文の訳であるにもかかわらず、文末「ね」の表現を含む日本語訳文が2019年2月時点で6例ヒットするが、今後、修正予定である。）

(3) 授受表現・敬語

日本語では、「～てあげる」、「～てくれる」、「～てもらう」のような授受表現は、恩恵の授受や感謝の認識を含意するが、英語ではこれらの認識を特定の形式で表現せず、また、明示するときがあっても、文脈に応じた語彙を付け加える形等で表現される。また、人間関係の上下を表示する尊敬語や謙譲語も、英語では一定の形式として対応するものがない。そのため、SCoREの日本語対訳では授受表現や敬語を使用せずに訳出することを心掛けている。

以上、英文と日本語対訳において、等価性が制限される、もしくは、等価性について考慮しない項目について説明した。これらの項目は、英語との対照においては、いわゆる日本語らしさの特徴でもある。つまり、SCoREの日本語対訳は、文法に関わる等価性を重視する一方で、発話の「らしさ」は追求しないということになる。

SCoREの英文の対訳方針に沿った、英文の構造が明示的になるような訳や、逐語的な訳は、しかしながら、日本語らしさを損なうだけでなく、日本語文として意味が曖昧であったり、不自然すぎる訳になってしまったりする場合もあった。また、英語と日本語の「語」の示す範囲が異なるために、訳出の工夫が必要な例文もあった。さらに、文法項目の特徴を示すために統一的な訳をする場合もある一方で、対応する語彙の意味の豊かさを示したいという思惑がある場合もあり、いくつかのバリエーションを与えるために異なる訳を付した場合もある。次節では、具体的な事例をみながら、どのような訳が選択されたかについて見ていく。

3. SCoREの日本語訳の具体例

本節では、文法に関連する等価性を保持し、かつ、一読で理解できる分かりやすい日本語対訳を作成するための過程で、課題となった点について、具体的な事例を検討し、英語学習に適した日本語訳の方法について考える。同時に、日本語と英語を対照させることで観察された、それぞれの言語の特徴についても触れながら、日本語の特徴について言及する。以下では、時制の表現、名詞、人称、動詞、借用語といった観点から、日英の語彙が示す意味範囲の違いについて指摘し、SCoREの英文の日本語対訳としてどのような対処を行ったかについて説明する。

3.1 文法項目を明示的にするための訳（時制、仮定法）

英語の時制表現によって示される概念の範囲は、日本語の時制表現の示すそれと異なる。

3.1.1 現在形

日本語において「いつも土曜の午後は何をしますか？」というような質問に対し、「（私は）英語を勉強します」という応答は自然であろう。また、「大学で何を勉強しているのですか」という問いに対し、「（私は）英語を勉強しています」という応答も自然である。日本語では、この2つの回答は、「勉強します」と「勉強しています」と異なるが、英語では両方とも *I study English.* となる。つまり、習慣を表す現在時制は、日本語では「します」と「しています」という両方の表現が対応できるということである。しかし、SCoREの日本語対訳の作成においては、英語例文で用いられている時制を明示的に提示したいため、一般的に現在形として最も用いられている語形である「します」を、いわば規範的なマーカーとして一律的に用いることで、当該時制が用いられていることを示している。よって、上の例では、前者の「私は英語を勉強します」を採用するということになる。教科書や学習参考書、また辞書の例文の訳などを参考にしながら、現在形は「～します」、現在進行形は「～しています」や「～するところです」、現在完了形は「～したことがあります」や「～してしまっています」、過去完了形は「～してしまっていました」のように、英語例文の時制に応じて定型となるような文末表現を選択し、日本語訳を作成することを基本とした。特に、初級レベルの英語例文に対する訳については概ね反映されている。

3.1.2 現在進行形

しかしながら、このような定型訳では対応する内容が等価にならない例がある。たとえば、現在進行形は「～しています」と訳するのが慣習化されているため、*The*

bus is stopping. を「バスは止まっています」と訳してしまう学習者もいるかもしれない。しかし、この日本語訳文の「止まっています」のほうの意味は、今現在、止まっている状態を示し、動いていないことも指す（今井、2010）¹⁷⁾。一方、英語の進行形では、止まるという行為が進行していることが表されているため、「止まろうとしています」と訳出するほうが適切であろう。

3.1.3 現在完了形

現在完了形を用いた英文の日本語訳においては、下に示す中・上級の英文の対訳例のように、訳が一律に統一されているわけではない場合もある。「変わっていません」と「変わりませんでした」というように異なるバリエーションがあることを示している。

- (1) Nothing has changed since you left. あなたが去ってから何も変わっていません。
- (2) Nothing has changed in a long time. 長い間、何も変わりませんでした。

3.1.4 現在完了進行形

現在完了進行形については、物事の進行が発話時まで続いていることを強調する機能や、感情的な意味合いを表現できる働きを持つが^{18), 19), 20)}、日本語の時制表現で対応させるのは困難である。よって、次のように「ずっと」という副詞によって、そのニュアンスを訳出している。

- (3) I have been waiting for you for two hours. 私はあなたを2時間ずっと待ち続けています。
- (4) I have been teaching here for many years. 私は何年もの間ここでずっと教師をしています。

ちなみに、状態動詞の現在進行形についても、たとえば、*I am loving it*. のように強意を表す表現があるが、このような文は、口語的であるという理由で SCoRE の英語文には含まれていない。

このように英語の時制に対応する日本語の文末表現の定型訳を SCoRE の日本語訳の多くで用いているが、定型訳では意味内容が反映できない場合や、バリエーションがあることをあえて示したい場合などについては、定型外の訳を選択している。

3.1.5 仮定法

時制の訳出の場合と同様に、願望を表す仮定法過去や仮定法過去完了を用いた英文の訳出においても、これらの文法項目が使われていることを示すために、一種のマーカーとして、一律に「～なあ」と訳している。

- (5) I wish I were smarter. 私はもっと賢かったら

なあ。

- (6) If I was free, I'd watch a movie. もし私が暇ならば私は映画を見るのになあ。

3.2 文法項目を明示的にするための訳（複数形）

名詞の複数形が使われていることを明示するために、通例の日本語表現では複数形にしないで用いる名詞でも、違和感のない程度であれば、複数形を明示して訳出した。特にこれは、初級レベルの英語文の訳出において行われている。具体的には「親たち」や「子どもたち」などである。

3.2.1 students

下記の例文(7)では、*students* を「学生たち」とし、複数形であることを示して訳出している。また、冠詞 *the* についても明示的に「その」と訳出している。

- (7) The students were bored. その学生たちは退屈でした。

3.2.2 dogs

しかし、(8)のように、「dogs」という名詞複数形を日本語訳するとき、接尾辞の「たち」を付加して複数を表現すると英文が意図する伝達内容と厳密には一致しないかもしれない日本語訳になってしまう場合がある。

- (8) Dogs bark at people who threaten them. 犬は自分たちをおどかす人たちにほえます。

このとき、文頭の「Dogs」は無冠詞の複数で総称を表している。つまり、どの犬かを特定せずに、犬というものの性質を述べている。一方、「たち/達」は、名詞に付加される複数接辞であるが、「消しゴムたち」や「車たち」というような無生物には後続せず、(ただし、消しゴムや車が生き物として描かれるような物語世界は除く)、「悪い人たち」や「少年たち」のように一般的にはヒトを指示する有生名詞を選択するという特徴を持つ²¹⁾。犬は、実際のところ、無生ではないが、「たち」が付かない場合が無標の表現であり、「たち」をつけると、親しみが加わった有標の表現といえる。別の言い方をすると、「たち」が付けられた場合は、特定の犬（複数）が想起されやすく、英語の無冠詞複数形が示すような、犬一般の性質について言及する文とは相性が悪いと言えるだろう。このため、(8)では *dogs* は「犬」と訳出している。また、文中の *them* に対応する「自分たち」という表現によって、犬が複数表現であることが推測可能である。

3.2.3 e-readers

また、(9)の *e-readers* ように無生の名詞の複数形を日本語で表現するのは難しい場合が多い。

- (9) Will e-readers help students to read better? 電子書籍リーダーは生徒たちがより良く読書する手助けをするでしょうか？

意識としては、たとえば、「電子書籍リーダーというものは生徒たちが～」のように表現することも可能であるかもしれないが、日本語の「～というもの」に対応するはずの英語の語彙が欠如するというようになってしまふ。そのため、特に初級レベルの英語に対する訳としては望ましい訳ではなく、電子書籍リーダーが複数形であることを示すのは困難だと判断した。しかし、将来的には、無冠詞複数形の無生名詞の例文が複数提示され、「～というもの」という訳文に対応することに気づくことができれば、当該形式が一般的な総称を示すという学習が可能となるかもしれない。これについては今後の課題である。

3.3 語彙に関わる訳出の課題（「自分」／親族関係／動詞／借用語など）

3.3.1 自分

英語の所有格は日本語の「自分の」に対応する場合と、そうではない場合がある。

- (10) He has changed his name to something easier to pronounce. 彼は彼の名前を発音しやすい名前に変更しました。

英語では文頭の *He* と *name* の左の *his* は同一人物のことを指す場合もあれば、そうではなく、*He* と *his* が別々の人物、たとえば、前者と後者がそれぞれ父と息子を目指すような場合も可能である。また、日本語文においても、「彼は彼の名前を発音しやすい名前に変更しました。」という表現には、文中の2回使われている「彼」が同一人物を指す解釈と、そうではなくて、ふたりの別の人物を指す場合があると思われる。ただし、前者の、同一人物を指す解釈の場合は、「彼は自分の名前を発音しやすい名前に変更しました」のように「自分」という表現を使うか、あるいは、単に、「彼は名前を発音しやすい名前に変更しました」のほうが、「彼の」と表現するよりも、容認度が高い。前述したように、訳出にあたっては、提示されている英語文に含まれている情報のみに基づいて日本語訳として作成する方針であるため、文脈なしでは、この英文の *he* と *his* が同一人物なのかそうでないのかは不明である。そのため、このような場合は、「自分の」という訳を付けたものと「彼の」としたものが混在している。

3.3.2 親族関係

英語では親族関係を表す *brother*, *sister* はそれぞれ

「兄」か「弟」, 「姉」か「妹」を指し、指示対象と比べて年上であるか、年下であるかは明示しなくてもよい。一方、日本語では、年齢が上であるか下であるかによって使用する語が異なる。英語例文にこの語が用いられているとき、訳出者の好みによって、兄か弟、姉か妹のいずれかを選択した。また、*uncle* には「伯父」と「叔父」、*aunt* には「伯母」と「叔母」の訳があるが、これらの語については、それぞれひらがな表記で、「おじ」、「おば」として訳出している。

3.3.3 動詞

次の例文は動詞に関わるものであり、英語の動詞の意味や、動詞と名詞の関係が、日本語の動詞に直に反映されないことが示される。（日本語訳のうち最初の文は1回目の訳、次は2回目の改訳、最後の日本語訳は3回目で確定した訳を示す。）

- (11) She is a woman whom the press adores. 彼女はマスコミが崇敬する女性です。→ 彼女はマスコミが大好きな女性です。→ 彼女はマスコミが賛美する女性です。

英語の動詞 *adore* は最初の訳では「崇敬する」という語彙があてられている。しかし、日常で用いられる用語とはいいがたく、また、「マスコミ」と「崇敬する」というコロケーションも不自然であると判断した。2回目の改訳は、*adore* に「大好き」という訳を選択しており、わかりやすい語ではあるが、英文では、マスコミが *adore* するという意であるのに、訳出された日本文を見ても、彼女の性質として、彼女がマスコミを好きであるという意味にもとれる両義的な文となってしまう。よって、3回目の訳では、「賛美」という訳語を充てることによって、英語が示す構造が担保されたまま、日本語に訳されている文となり、この文を SCoRE の英語文の対訳として選択した。

次の例は、時間の図像性 (iconicity) に関わるもので、日本語に訳すると行為の時間の流れが不自然になってしまうような英文の例である。（矢印の左側が1回目の訳、右側が2回目の訳であることを示す。）

- (12) The man took several hostages whom he killed. その男性は彼が殺した数人の人質を取りました。→ その男性は数人の人質を取り、その人質を殺害しました。

通常の時間の流れに沿って、英文の伝達内容を理解すると、まず人質がいて、その人質を彼が殺す、という事案がある。しかし、最初の訳の案では、「殺した人質を取る」となるために、すでに死んでいる人質をとるよう

な印象を与えてしまう。よって、「人質を取り、その人質を殺害した」と左から右に説明的に訳すことで解釈に不都合が起らないようにした。

3.3.4 借用語

現代の日本語の自然な発話には外来語の表現が多く含まれており、日本語対訳においてもその影響が多く認められる。しかし、日本語における借入語や、借用語を基に作り上げられた表現は、元の英語表現が意図する意味と完全には一致せずに、特定の限定された意味範囲を持って、異なった概念を示すことも少なくない (Winford, 2003)²²⁾。日本語における「マンション」が、英語の *mansion* では「大邸宅」という意味内容を示すというのはよく知られた例である。あるいは、日本語において、英語の *water* にあたる語は「水」として認識されているが、英語の *water* は「お湯」も指示することができる (鈴木, 1973)²³⁾。より詳細な認知意味論的観点からの分析は、廣瀬 (2012)²⁴⁾ を参照されたい。さらに、最近の例でいえば、フランス語からの借用で、英語においても *cafe* として使われる語は、日本語においても「カフェ」として「喫茶店」を意味する語彙として使用されるが、同時に、「サイエンスカフェ」や「哲学カフェ」などのように複合語の右側の要素として用いられる場合は、対話の場という意味に変化しているようである。このような日英の「ずれ」の存在を考慮し、SCoRE の英語文の日本語訳については、借用語ではない表現を優先するという方針をとっている。たとえば、(13) の例では、一回目の訳出では、「ロックする」であった表現は「かぎをかける」と修正されている。

- (13) He forgot to lock the door. 彼はドアをロックするのを忘れました。→ 彼はドアにかぎをかけるのを忘れました。

しかし、代替できる簡潔で適切な日本語がないような場合、特に名詞表現に関しては借用語を用い、カタカナで表記している。たとえば、*hybrid car*, *off season* はそれぞれ「ハイブリッド・カー」、「オフシーズン」としている。

なお、2019 年 2 月現在で、SCoRE のウェブでは、*Sometimes governments will list places to avoid because of armed conflict or other safety reasons.* に対して、「時々政府は武力紛争またはほかの安全上の理由のために避けるべき場所をリストアップするでしょう」という対訳が付与されているが、「リストアップする」は「～場所の一覧表を作成する」へ修正の予定である。

3. まとめ

上記の SCoRE の英語例文への日本語対訳作成についての考察は、日本語母語話者が英語を学習するときに助けとなるような日本語訳を探る試行錯誤の実例の一部である。学習者が自分で言語の規則やルールに気づく学びである DDL において、対訳の果たす役割は小さくないように思える。複数の実例を観察して英語例文から共通の要素を見つけるときに、日本語訳はヒントを提示することができるからである。

SCoRE の英語例文に付与されている日本語訳は全体の傾向としては逐語訳的であり、日本語らしさを備えた通常のスムーズな日本語文とは性質が異なる。ある短編小説 (清水, 1988)²⁵⁾ では、中学校教科書の英文を直訳したようなリズムでしか会話ができなくなった、架空の登場人物が、会話が弾まないことや、ぎこちなさを嘆いている。しかし、英語の学習にとっては、ぎこちない日本語文であっても、英語の文の構造が反映されており、かつ、伝達内容が日本語においても一致するような逐語訳的な訳が有用であると考えている。日本語と英語の対照研究という観点から、それぞれの言語の特徴や差異について論じている研究は数多く報告されており (池上, 1981; 廣瀬他, 2010; 廣瀬, 2017; 中右, 2018; 高嶋, 2019)^{26) - 30)}、そこから得られる知見は、どのような日本語訳が英語学習にとって有用であるかを考察するにあたって、間接的ではあるにしろ、重要な示唆を与えている。それらの研究成果を踏まえながら、日本語文として容認でき、また内容理解もスムーズにできる一方で、英語学習に有益な訳がどのような特徴を持つのか、今後も考察を重ねていきたい。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP17H02366 の助成を受けたものです。

参考文献

- 1) Johns, T., Contexts: The Background, Development and Trialing of a Concordance-based CALL Program, in Wichmann, A. Fligelstone, S., McNery, T. and Knowles, G. (eds.) *Teaching and Language Corpora*, London: Longman, 1997, 100-115.
- 2) Cobb, T. and Boulton, A. Classroom Applications of Corpus Analysis. In D. Biber & R. Reppen (eds.), *The Cambridge Handbook of Corpus Linguistics*. Cambridge: Cambridge University

- Press, 2015, 478-497.
- 3) Mizumoto, A. and Chujo, K. A Meta-analysis of Data-driven Learning Approach in the Japanese EFL Classroom. *English Corpus Studies*, 22, 2015, 1-18.
 - 4) Chujo, K., Oghigian, K. and Akasegawa, S. A Corpus and Grammatical Browsing System for Remedial EFL Learners. In Leńko-Szymańska, A. and Boulton, A. (eds.), *Multiple Affordances of Language Corpora for Data-driven Learning*. Amsterdam: John Benjamins, 2015, 109-128.
 - 5) 中條清美, 若松弘子, 濱田彰, 内山将夫, 赤瀬川史朗, ジョンソン・ミシェル, 西垣知佳子, 「教育用例文コーパス SCoRE 第三次開発と SCoRE を利用した DDL 文法学習」, 日本大学生産工学部研究報告 B (文系), 第 50 巻, 2017, 13-20.
 - 6) 中條清美, 濱田彰, 若松弘子, 小林雄一郎, 横田賢司, 内山将, 赤瀬川史朗, ジョンソン・ミシェル, 西垣知佳子「教育用例文コーパス SCoRE 第 4 次開発」日本大学生産工学部研究報告 B (文系), 第 51 巻, 2018, 1-12.
 - 7) 中條清美, 若松弘子, 濱田彰, 内山将夫, 赤瀬川史朗, ジョンソン・ミシェル, 西垣知佳子 (2017). 前掲論文.
 - 8) 中條清美, 濱田彰, 若松弘子, 小林雄一郎, 横田賢司, 内山将夫, 赤瀬川史朗, ジョンソン・ミシェル, 西垣知佳子 (2018). 前掲論文.
 - 9) 中條清美, 濱田彰, 若松弘子, 小林雄一郎, 横田賢司, 内山将夫, 赤瀬川史朗, ジョンソン・ミシェル, 西垣知佳子 (2018). 前掲論文.
 - 10) 若松弘子, 石井卓巳, 中條清美, 「学習支援用日英例文パラレルコーパス SCoRE の構築における課題: 日本語対訳例文の訳出に焦点を当てて」, 英語コーパス研究, 第 22 号, 2015, 35-45.
 - 11) 鎌田修. 『日本語の引用』, 東京, ひつじ書房, 2000.
 - 12) 鎌田 (2000). 前掲書.
 - 13) デロワ中村弥生, 伊藤文, 「引用構文にかかわる誤用の分析」, 第 19 回ヨーロッパ日本語教師会シンポジウムジョイントセッション, 第 2 回日本語学研究会フランス語母語話者の日本語学習における誤用の分析, 2015. <https://hal-inalco.archives-ouvertes.fr/hal-01597898/document>
 - 14) Kenny, D. Equivalence. In Baker, M (ed.), *Routledge Encyclopedia of Translation Studies*. London: Routledge, 2001, 77-80.
 - 15) Baker, M. *In Other Words: A Coursebook on Translation*, 2nd edition, London: Routledge, 2011.
 - 16) 金水敏. 『バーチャル日本語 役割語の謎』, 東京, 岩波書店, 2003.
 - 17) 今井隆夫. 『イメージで捉える感覚英文法—認知文法を参照した英語学習法』, 東京, 開拓社, 2010.
 - 18) 荒木一雄, 安井稔. 『現代英文法辞典』, 東京, 三省堂, 1992.
 - 19) 柏野健次. 『テンスとアスペクトの語法』, 東京, 開拓社, 1999.
 - 20) Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G., and Svartvik, J., *A Comprehensive Grammar of the English Language*, London: Longman, 1985.
 - 21) Kaiser, S., Ichikawa, Y., Kobayashi, N., and Yamamoto, H. *Japanese: A Comprehensive Grammar*, Second edition, Abingdon: Routledge, 2013.
 - 22) Winford, D. *An Introduction to Contact Linguistics*, Malden: Blackwell Publishing, 2003.
 - 23) 鈴木孝夫. 『ことばと文化』, 東京, 岩波書店, 1973.
 - 24) 廣瀬幸生. 「認知言語学と日英語対照研究—ことばからこころと文化に迫る—」『第 13 回 2012 年度認知言語学セミナー日本認知言語学会予稿集』, 大東文化大学, 2012 年 9 月 7 日.
 - 25) 清水義範. 『永遠のジャック&ベティ』, 東京, 講談社, 1988.
 - 26) 池上嘉彦. 『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論』, 東京, 大修館書店, 1981.
 - 27) 廣瀬幸生, 長谷川葉子. 『日本語から見た日本人—主体性の言語学—』, 東京, 開拓社, 2010.
 - 28) 廣瀬幸生. 「自分の言語学—言語使用の三層モデルに向けて—」, 廣瀬幸生, 島田雅晴, 和田尚明, 金谷優, 長野明子編, 『三層モデルでみえてくる言語の機能としくみ』, 東京, 開拓社, 2017, 2-25.
 - 29) 中右実. 『英文法の心理』, 東京, 開拓社, 2018.
 - 30) 高嶋幸太. 『英語教師が知っておきたい日本語のしくみ』, 東京, 大修館書店, 2019.

(H31. 2. 10 受理)